



2020年（令和2年）

1月号（No. 896）

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

人生を決めた西表島とボルネオ島の自然と人々の営みを記録したい

内モンゴル生まれだけに北方志向だった安間さんだが、「未知のヤマネコ発見」のニュースを知るとともに南方志向に転向。西表島でのイリオモテヤマネコの生態調査に始まり、ボルネオ島での動物調査に没頭する。それらはハードな活動だったが、克服できたのは、父の山仕事に同行して培われた、山歩きの経験だった。

秩父宮記念山岳賞受賞者 安間繁樹

私は今75歳。若いころ歩いた西表島の沢を、60歳を過ぎてから一つ一つ歩き直している。何故、そんなことをしているのか？ それには深い訳がある。

私は高校卒業まで静岡県清水市（現・静岡市清水区）で暮らした。両親の郷里である。就学前から山に親しんできたように思うが、それは父が材木商で、山へ入るとき

よく連れていってくれたからだろ。父は良材を求めて、大型バイクで富士川、大井川、天竜川、木曾川まで走っていた。いつ居眠りするかわからない私は、燃料タンクにまたがった姿勢で、紐で括り付けられていた。そして、父が山林主と交渉する間、私は山や沢で虫を探したり小鳥を見たりして、時間を過ごしていたわけである。

目次

人生を決めた西表島とボルネオ島の自然と人々の営みを記録したい	1
カンチェンジュンガ展望トレッキング報告	4
第2期「健康登山塾 2019」を開催	6
父と始めた山登りから「自分の山」へ	9
追悼 竹内哲夫さんと山	10
追悼 宮原巍君を悼む	11
東西南北	12
活動報告	12
資料映像委員会	
新入会員	14
図書受入報告	14
支部だより	15
越後支部	
図書紹介	16
会務報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
INFORMATION	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時

生き物が好きで、大人になったら動物学者になろうと決めていた。山も好きで、中学時代には泊まりで出かけたり、単独で南八ヶ岳を縦走したりし、高校では山岳部に在籍した。ところが、2年生のとき父を亡くし、材木屋を継ぐべく大学は法学部に進んだ。大学では部に所属することなく、独りで山歩きや旅行を趣味としてきた。当時は山岳部やワンダーフォーゲル部の事故が相次ぎ、そういったことへの不安があつたし、体力的にも自信がなかったからだ。



備船してボルネオ島最奥地に向かう筆者（65歳のころ）

り文句だった。成長するに従って、北海道への憧れが強くなった。そして、50年前、東京オリンピックによる大学の臨時休講を利用して、初めて北海道を旅行した。積雪50cmの羅臼岳に登頂、単独で知床横断も果た



食物連鎖の頂点にいるイリオモテヤマネコ

した。北海道は私を存分に魅了した。来年も北海道だ。そう決めて、旅費稼ぎのアルバイトに専念した。

初めての西表島

ところが、翌1965(昭和40)年3月、「西表島で未知のヤマネコ発見」という、私にとって衝撃のニュースが流れた。「えっ、そんな所がまだあったの?」。その年の夏、パスポートを持参、種痘を済ませて西表島へ渡った。沖縄の返還前で、現地ではドルが使われていた時代だ。このとき以来、私と南との関わりが始まった。当時の西表島は戦後の入植から20年、まだ移民が続いていた。全島を覆う

密林。大自然が人間を圧倒し、開拓者の姿がちっぽけに見えた。私はなんでも見たいという衝動に駆られ、道もない海岸線を伝って島を一周してしまった。そして、この魅力ある島の研究に青春のすべてを懸けてみよう、と、あっさり決めたのだった。

それからが長かった。法学部卒業後、改めて生物学を学んだ。西表島へは毎年通った。それでも足りない、と現地で教員の職を得て、仕事をしながら研究を進めた。しかし、教員の仕事に時間を奪われると、研究の時間が確保できない。大学院に戻ってからは現地で生活し、研究に専念した。対象はイリオモテヤマネコだった。当時、イリオモテヤマネコは最も調査が難しい動物と言われていた。夜行性、警戒心が強い、数が少ないことが理由だ。しかし、ある程度西表島を知っていた私は、いち早く、むしろ調査しやすい動物だということに気付いた。哺乳類がとりわけ少ない島で、野ネコとの区別さえできれば問題ないのである。

山野での調査は全く苦にならなかった。ダニやヒル、沢の水を飲んだり、木登りして方向を定めた

り、なんでも小さいころからの経験が役に立った。しかし、私がかかわったのは、誰もやったことのない夜間の直接観察だ。それなのに、たった独りの夜は何か不安だし怖い。だが、これはどうしても克服しなければ先に進めない課題だった。何が怖いのか。ハブ、サソリ、ムカデ。どれも、積極的に向かってくるものではない。幽霊・魔物、仮にいたとしても、力づくで襲ってくることはないはずだ。怖いのは人だ。しかし、悪意を持って私を狙う人間がいたとしても、山道から外れた闇の森にいる私を探し当てることは、きつとできない。そう結論すると、なんの不安もなく、独りで過ごすことがむしろ楽しくなってきた。身体が闇に溶け、心が無限大の境地に達することがある。そんなときは絶好調で、真つ暗な静寂の中でも、ヤマネコの到来をピタリと当てることができた。

西表島での生活は20代末まで続いた。世界最初の映画撮影にも成功したし、論文「イリオモテヤマネコの食性と採食行動」で、東京大学から学位(博士号)を授かり、私の青春時代も終わったように思う。

ボルネオ島へ

琉球列島にはアマミノクロウサギ、ヤンバルクイナなど古い形質を持つ固有種が多いという特徴があるが、イリオモテヤマネコを主とした研究の過程で、私はその謎を解く鍵は南にあるのでは、と考えた。そして、最初に訪ねたのがボルネオ島だった。1985(昭和60)年のことである。独りキナバル山に登り、再訪できますようにと祈ったものである。

夢はかなうものだ。2ヶ月後、国際協力機構(JICA)から電話が入った。「ボルネオ島で研究プログラムが始まる。参加しないか」との要請。「渡りに舟」とはこのこと



西表島・仲間川。山中に全く道はない

だ。惑わず参加した。以来、足掛け25年間、正味16年間をボルネオ島のカリマンタン（インドネシア）、ブルネイ、サバ（マレーシア）で暮らした。

仕事は動物の調査並びに現地の若手研究者の育成であった。高い山へ登る機会はなくなったが、熱帯雨林あるいは標高1000m前後の高原地帯を歩き続けた。ここでも、山の経験が活きてきた。日本の2倍の面積があるボルネオ島が、自分の庭のように思えたりもした。研究成果は論文や報告書より、むしろ図鑑、解説書、マニュアル本など、研究者やレンジャー、ガイドが利用できる書物として現



南アジアの最高峰キナバル山(4095m)

地で刊行した。

あらゆる樹木が実を結ぶ「一斉開花」という現象がある。「人間なにも働かなくても食べていける」。そんなふうにも思ったりもする。沢に水がなくても、切ると水が出てくる蔓植物がある。そんな森林の魅力は歩いてみて初めて知ることなのだが、動物の生態、人々の営みを見ることがも分かることを体得した。特に自分自身が、山の動物の一員となること。畏敬の念を持って自然と接することの大切さを学んだ。

先住民たちには独りで山へ入る習慣がない。山へ入っても夕方には戻る。やむを得ずバークするときは一晩中、火を絶やさない。山にはたくさんの精霊が住み人を襲うし、魂を奪われ気がふれてしまうと信じられている。そのような文化の中で、いつも独りで山歩きをする私は、ちよつとした英雄扱いをされていた。こんな生活が長かったから、私の山歩きは皆さんのような、たくさんの峰を目指す「格好の良い」登山ではなかった。方向さえ定まらない、森を彷徨するアナグマのような山歩きだ。お陰で意外と鼻が利くようになった

みたいだ。

再び西表島へ

私の専門家としての海外生活は2010（平成22）年を最後に終了した。しかし、それ以前、21世紀に入り日本にいる期間が増えたことを機に、西表島の山歩きを再開した。

実は、西表島は初心者向けの山である。最高峰の古見岳でさえ標高470m、東京近郊の高尾山にも及ばない。1000を超す滝があるが、いずれも脇を迂回できる。他府県の山と違って、どんな崖でもたいてい木が密生しているからだ。それに終日沢の中を歩いたり、真冬の野宿で寒い思いをしたとしても、凍死することは絶対がない。

では何が大変なのか。東京近辺の人にはお分かりいただけと思うが、房総半島には特別に高い山はない。そのかわり、いくつもの小さな尾根と沢が入り組んで、地形を複雑にしている。西表島の山は、これと良く似ている。それは両者とも1500万年前の海底が隆起したという共通の地史を持つからだ。それでいて西表島には山道がない。西表島は面積281km²、

南房総市は230km²。南房総市全域が深い森に覆われ、しかも道がない状態を想像してほしい。それに高温多湿を加えると、西表島の山をイメージできるだろう。

稜線部には、2万5000分の1の地図でも表わせない無数の起伏があり、他府県の山にはないツルアダンなどやつかいな蔓植物で塞がれている。普通のヤブこぎでは通用しないのである。森の中では眺望が利かないし、高温多湿で蒸し風呂に入っているようだ。むしろ、そういうことからくる精神的圧迫感と疲労、暑さへの適応が西表島を難しい山にしているのではないだろうか。それを超えると、快適な楽しさだけが後押しをしてくれる。

「西表島とボルネオ島の自然と人々の営みを、あるがままに記録する」。これが私の目標である。今は、若いころから培った山の知識と技術を駆使して昔のルートをたどったり、新たなルートにチャレンジしているが、せっかくなら、すべての峰と沢を踏破したいと思っている。時間を掛けて、無理せず安全第一で、西表島を歩き続けたい。

（千葉支部会員）

創立120周年記念事業

カンチェンジュンガ展望トレッキング報告

重廣恒夫

シッキム側からのアプローチ

人類最初のエベレスト登山は、英国隊によって1921年、ダーズリンから始まった。それ以前、1848年に英国人植物学者J・D・フッカーがこの地域の探検を行ない、『ヒマラヤ紀行』を著した。また、1899年には英国人登山家D・W・フレッシユフィールドがカンチェンジュンガ峰一周を行ない、『カンチェンジュンガ一周』を著した。

驚嘆すべきは、1918（大正7）年に日本人最初のヒマラヤ登山が行なわれたことである。慶應義塾大学山岳部の初代部長で、哲学研究のためダーズリンに滞在していた鹿子木員信が、ゴーチャラを越え、タルン氷河からカンチェンジュンガを目指した。その記録は『ヒマラヤ行』として著されている。いずれもが、その後のヒマラヤ登山の導火線となった。

今回、シッキム側からのカンチェンジュンガ展望トレッキングを実施したのは、これから始めるグレイ

ト・ヒマラヤ・トラバース(G・H・T)開始に当たって、ヒマラヤ高峰登山の出発点となったダーズリンを訪れ、指呼の間にそびえる、朝陽に輝くカンチェンジュンガ南面をこの目で見ておきたいという想いであつた。

実施日…2019年10月26日(土)・11月9日(土)

参加者…重廣恒夫(72)、中村三佳(56)、柴田美生子(44)、重廣元子(69)

行程

1日目 10月26日(土) 成田空港→ニューデリー空港

2日目 10月27日(日) ニューデリー空港→バグドグラ空港→ダーズリン

3日目 10月28日(月)(曇のち晴) タイガー・ヒル、ヒマラヤ登山学校、博物館

4日目 10月29日(火)(晴) ダージリン→ジョレタン→ヨクサム(123km、7時間)

5日目 10月30日(水)(晴) ヨクサム→サッチェン→バッキム

(14km、8時間)

6日目 10月31日(木) バッキム→ツォカ→フェダン(6km、5時間)

7日目 11月1日(金)(晴のち曇) フェダン→ゾングリ(8km、7時間半)

8日目 11月2日(土)(晴) ゾングリ→コクチュラン→タンシン(11km、9時間)

早朝にゾングリ・トップ(4170m)を往復する。日の出前から登り始め、1時間弱で到着し朝陽の出るのを待った。待望の太陽が顔を出すと、カンチェンジュンガが赤く燃え、山容の大きさを際立たせた。1984年に縦走した南峰から中央峰の稜線が懐かしい。

下山後、朝食を摂った後タンシンへ向かう。ゾングリから山腹沿いに北上しながらカンチェンジュンガやパンディム連山の展望を楽しんだのち、途中の峠から標高差350mの大下りとなる。コクチュランの小屋前で昼食の後、2つの橋を通ってプレク川の対岸に渡り、河原の大岩の間を縫ってタンシンに到着した。

9日目 11月3日(日)(晴のち曇、午後小雪) タンシン→オラン

今日は起伏の少ない、緩やかで快適なトレイルを歩く。荷物を運んだ馬も早々に解き放たれ、草を食んでいる。キャンプ地は北面にカンチェンジュンガ南峰を、東方にパンディムを見る快適な場所であり、マニ石が多い。参加者のSPO2(朝・晩計測)はいずれも90台で安定しており、順化は特に問題ないようである。

10日目 11月4日(月)(曇のち晴) ラムネー→カンチェンジュンガ南壁ビュー・ポイント→ラムネー(7km、7時間)

天気良ければ2時半起床、3



ダーズリンの街並みとカンチェンジュンガ山群

タン→ラムネー(4km、2時間半)

今日は起伏の少ない、緩やかで快適なトレイルを歩く。荷物を運んだ馬も早々に解き放たれ、草を食んでいる。キャンプ地は北面にカンチェンジュンガ南峰を、東方にパンディムを見る快適な場所であり、マニ石が多い。参加者のSPO2(朝・晩計測)はいずれも90台で安定しており、順化は特に問題ないようである。

10日目 11月4日(月)(曇のち晴)

ラムネー→カンチェンジュンガ南壁ビュー・ポイント→ラムネー(7km、7時間)

天気良ければ2時半起床、3

ムネー(7km、7時間)

天気良ければ2時半起床、3



ゾングリ・トップから見た朝陽に輝くカンチェンジュンガ南面

時出発の予定であったが、2時の時点で星が消え、風も出てきたので予定を変更。6時過ぎに起きて、8時過ぎの出発となった。水の流れる牧草地を抜け、エンド・モレーンの丘を抜けると、眼下にエメラルド・グリーンの聖なるサミティ湖が見えた。湖の東の縁を通って南壁ビュー・ポイントまで登るが、残念ながら小雪もちらつき展望はない。それでも、高度障害にもならず4600m近い高所に到達したので皆の顔は満足げである。天候の回復も望めないで、記念撮影の後ラムネーに降りた。

ガイドとの打ち合わせで、今後、天候も好天の兆しはないので、明

日から下山を始めることとした。

11日目 11月5日(火) (小雪のち小

雨) ラムネー→コクチュラン→

タンシン→コクチュラン→

フェダン(13km、8時間)

往路をコクチュランに向かい、小屋で早い昼食を摂った後ゾングリへの急登ではなく、フェダンへの水平道に入った。荷物を運ぶ馬はゾングリ経由という。なぜ水平道を行かないか疑問に思ったが、案外アップダウンがあるのと、馬が滑落するリスクを避けたいらしい。思いのほか時間の掛かった水平道が終わり、フェダンに到着した時はほっとした。ほどなく馬も到着したが、行程が1日短縮されたので、多量の飼料葉にありついてる。雨のやんだ夜空に一面の星が瞬き、冷え込んだ。

12日目 11月6日(水) (晴) フェダン

→ツォカ→バッキム→サツ

チェン(12km、6時間半)

昨夜の冷え込みで馬の鬣が凍り、朝陽に光り輝いた。プレク川の吊橋までは往路を下降するだけである。深まりゆく秋の景色を楽しんだ。今日の夕食で持参したふりかけやお茶漬のバック類がなくなった。食事も1日目には生野

菜のサラダが出たが、炒めものの以外の野菜もすべて湯通しか煮物にするように指示したので、下痢などのトラブルもなく、全員の体調は良好であった。

13日目 11月7日(木) (晴) サツチェ

ン→ヨクサム→ペリン(10km、

4時間)

トレッキングの最終日にふさわしく、朝から爽やかな天気となった。ヨクサムの村に下り、帰るトレッキング・ガイドやコック、コック補助、馬方3名にチップを支払う。車2台に分乗して、2時間半でペリンのペマヤンツェ・ゴンパを訪れた後、ホテルに入った。

14日目 11月8日(金) (晴) ペリン→

バグドグラ空港→ニューデ

リー空港

15日目 11月9日(土) 成田空港着

【G・H・T概要】

会報「山」2019(令和元)年9

月号(No.892)で報告したとおり、

本会は2025(令和7)年に創立120周年を迎える。記念事業の

一つとして、グレート・ヒマラヤ・

トラパス(カンチェンジュンガ

からK2まで約5000kmの踏査)を企画している。それは探検的

ヒマラヤ登山の少なくなった現代にあつて、これまで八十余年の長きにわたって日本山岳会や多くの登山家が行なってきたヒマラヤ未踏峰登山の足跡をたどりながら、ヒマラヤ地域の自然と人とその生活の変遷、地球温暖化により縮小を続ける氷河の調査なども行なう「温故知新」の踏査である。また、1枚の地図から目的の山やコースを決め、自分たちの手で頂を極める、ヒマラヤ登山本来の探検的登山を伝承する役割も担っていきたいと考えている。

G・H・Tは50日前後の日程で春・秋、年2回の踏査を予定している。概略は以下のとおり。

第I期(2020年春→22年秋)

カンチェンジュンガ→マカル

→エベレスト→マナスルの近隣

を通過し、西ネパールをインド

国境に至るグレート・ヒマラ

ヤ・トレイル(G・H・T)の踏

査および未踏峰登頂、未踏ル

トからの登頂

第II期(2023年春→24年秋)

インド国内

第III期 パキスタン国内

(創立120周年記念事業委員会委員長)

REPORT

第2期「健康登山塾 2019」を開催

健康登山塾2019塾長 齋藤 繁

定員を15名から25名に

昨年に引き続き、日本山岳群馬支部の活動として地元自治体や大学、新聞社の共催を得ながら「健康登山塾」を開催した。地元の人々を歩きながら健康増進を図ろう、山登りの実力アップを図ろうという趣旨で計画を練り、事前に出版した『登山を楽しむ健康トレーニング』（上毛新聞社、2017年発刊）をテキストとしている。

初開催の昨年は、初回の街中の公園での歩行練習を除いては、すべて赤城山のコースを開催地としている。今回は、初回到地元の保健学系大学の校舎を使用し、実習用のトレーニング・ジムも利用させていただいた。2回目以降は赤城山と並び上毛三山の名峰である榛名山を基本開催地とし、第2回と第6回は全く同一のコースとして、塾での活動成果が評価できるように配慮した。

昨年は定員15名で募集したところ119名の応募があり、抽選で25名を塾生としたので、今年は当

初より定員25名で募集した。その結果約80名の応募があり、今回も抽選で塾生を確定した。なお、前年度参加の複数名が再度応募しており、繰り返し受講することを希望する意欲的な方々に背中を押される感があった。医療スタッフとして、毎回医師3〜4名、看護師2名が付き、活動前後や歩行中のアドバイス、データ測定の補助を行なった。コースのガイドは、日本山岳群馬支部会員が毎回10名程度で担当した。

初回の歩行状況から歩行スピードなどを参考に毎回3班への班分けを行なったが、これは前年の事例での展開を参考にしての判断であった。各回ともコースの特徴に合わせて特別に意識すべき健康管理上の注意事項を設定し、参加者には課題を意識しながらの歩行を心掛けていただいた。

活動前後と活動中の数回、心拍数や血圧の測定を行なった。また、活動の前後で簡易な着地圧測定を行なった。全7回の開催内容は以

下に記すとおりである。なお、荒天のため1回は休会となったので、補習として希望者のみ参加の旧中山道・碓氷峠を歩く会を開催している。また、数名の個人の事情による欠席があったものの、各回とも非常に高い出席率となっている。なお、参加者には、日々のトレーニングが重要であり、塾開催時の運動は確認作業であることを十分ご理解いただいた。

【開催記録】

第1回 2019年4月13日(土)

高崎健康福祉大学

健康登山塾2019の開講式を高崎健康福祉大において開催する。2期目の塾生28人のうち25人と、20人を超える医療・サポーターのスタッフが出席する。主催者を代表して北原秀介支部長が挨拶し、塾長から「アスリートをつくるのが塾の目的ではない。自分のペースをつくること。それには週3回以上、30分以上のトレーニング」と塾の狙いを説明する。また、山中で実施する血圧測定などを解説した。

講義室での説明に引き続き、大学周辺での屋外トレーニング、同



メイン開催地となった榛名富士と榛名山

大学のトレーニング機器を利用した日々の鍛錬法説明、根井事務局長による「安全登山」についての講話も実施した。なお、今期は2月から塾生の募集を開始し、定員25人に対して80人を超える応募があった。抽選で28人（男13人、女15人）の塾生を選抜した。平均年齢は約59歳。前期とほぼ同様な構成となった。

第2回 5月12日(日) 榛名山・榛名富士

午前7時、榛名湖ビジター・センター集合、2名欠席。健康データ測定後、準備体操を全員で行ない、コース概要並びに諸注意を説明する。今回のポイントは、登り



出発前には入念な準備体操が必須

では大休止せずに歩き続けられるようにペースを調整すること、下りでは下肢関節への負荷を抑えるために、十分重心を低くしてから脚を出すこと、の2点とする。血圧、脈拍の測定地点はスタート、ゴール地点のほか、ゆうすぐ旅館裏の登り開始地点並びに山頂とする。A班から順に湖畔の遊歩道に沿って出発する。

A班出発7時40分、旅館裏登り開始点8時、山頂8時30分。下山開始8時45分、ビクター・センター前下山完了9時05分。B班、C班もそれぞれ各地点を15分遅れ、30分遅れで移動する。下山後、健康データ測定並びに各自での整理

体操の後、終了時のコメントとして、登りは各班とも休憩なしで登り切れ、目的を達成できたことを評価し、下山に関しては、A班は所要時間が短過ぎる感があるので、もう一段慎重な歩行を心掛けるように解説した。次回の説明を行ない、10時に解散する。

第3回 7月13日(土) 榛名山・二ツ岳とオンマ谷

午前7時、ヤセオネ峠集合、2名欠席。健康データ測定後、コース概要並びに諸注意を説明し、準備体操を全員で行なう。今回のポイントとは、登り下りが交互に発生するコースでのペースの調整、滑りやすい地点での慎重な足の運び方とする。血圧、脈拍の測定地点はスタート、ゴール地点のほか、雄岳頂上付近並びに雌岳往復後、避難小屋付近とする。A班から順にアプローチ舗装道に沿って出発。

A班出発7時15分、オンマ谷風穴駐車スペース登り開始点7時30分、雄岳山頂8時15分、雌岳山頂8時50分、ヤセオネ峠到着9時55分。B班、C班もそれぞれ各地点を15分遅れ、30分遅れで移動する。下山後、健康データ測定並びに整理体操の後、終了時のコメントと

して、各班とも登りは一定のペースで歩けたこと、下山は、数名下降時に濡れた木製階段で滑った人がいたものの大転倒はなく、慎重な下り方を習得できたことを評価した。次回の説明を行ない、11時に解散する。

第4回 9月14日(土) 榛名山・掃部ヶ岳

午前7時、湖畔の宿公園集合、7名欠席。健康データ測定後、コース概要並びに諸注意を説明し、準備体操を全員で行なう。今回のポイントとは、急な登り下りでのペースの調整、土の流出した木柵階段での慎重な足の運び方とする。血圧、脈拍の測定地点はスタート、ゴール地点のほか、上部登山ルート三叉路付近、頂上並びに硯岩分岐点とする。A班、B班は順に林間散策道を出発し、硯岩経由で山頂を目指し、下りは湖畔の宿公園への直接登山道をたどることとする。

C班は湖畔の宿公園から直接山頂へ向けて出発し、下りを硯岩経由とする。これは山頂への到着時間をほぼ同じにして、山頂で集合写真を撮る予定に合わせた計画。

A班出発7時15分、硯岩7時45分、山頂8時45分。B班はA班の

約5分後に各地点に到着する。C班はA班と同時に出発し山頂に8時30分ごろ到着する。山頂では3つの班全員そろって記念撮影をする。山頂から直接下降したA班、B班は9時40分ごろに下山完了、C班は硯岩経由で下り、10時10分ごろ下山完了する。下山後、健康データ測定並びに整理体操の後、各班ごとに解散とする。終了時のコメントとして、今回は天候が良好で気温・湿度も運動に適しており、各班とも快適なペースで歩けたこと、下山でも転倒者がなく、慎重な下り方を習得できたことを評価した。次回の説明を行ない、11時に全班解散する。



榛名富士山頂で休憩する塾生たち



最高峰掃部ヶ岳から笹原の中を下る塾生一行

第5回 10月19日(土) 榛名山・榛名富士

午前7時、榛名湖ビジター・センター集合、10名欠席。健康データ測定後、準備体操を全員で行ない、コース概要並びに諸注意を説明する。雨天のため当初の北面からの登りを変更し、南側の登山道往復とする。今回のポイントは、冷雨の中での体温管理、下りでは滑りやすい斜面での慎重な着地とする。血圧、脈拍の測定地点はスタート、ゴール地点並びに山頂とする。着地圧は器具不具合により測定せず。

A班出発7時30分、山頂8時10分。下山開始8時25分、ビジター・

センター前下山完了9時05分。B班、C班もそれぞれ各地点を5分遅れ、15分遅れで移動する。下山後、健康データ測定並びに整理体操の後、終了時のコメントとして、登りでの体温管理のコツがつかめたこと、下山時に転倒者がいなかったことなど、目的を達成できたことを評価した。次回の説明を行ない、9時45分に全班解散となる。

第6回 11月23日(土) 赤城山・地蔵岳

午前7時、赤城山ビジター・センターに集合し、大沼側から地蔵岳に登り、八丁峠側に下山の計画。その後、ビジター・センター会議室において、第2・3回の測定データの報告並びに修了証授与式を行なう。

すべての参加者から高評価

全6回の登山塾終了後、収集したデータの集計を行ない、個人別の成績表と修了証を作成した。前年は「まとめの会」を別途開催して各人に両書式を授与し、同時に集計結果の概要と医学的な考察内容を解説したが、今回は最終回到登山と「まとめの会」を直列開催した。今回も前年度と同様に、活動中の

血圧変動は、平地でのランニングや自転車エルゴメーターでの測定で報告されている結果と類似しており、運動開始早期の血圧上昇や運動終了時の低下が観察された。運動開始時には、収縮期血圧が200 mm hgを超えることも稀ではないうことを参加者に確認してもらったことができた。回を重ねるごとに血圧変動が小さくなる参加者が多かった。心拍数は各回とも毎分100回程度に維持している参加者が多く、運動負荷レベルとしては、ほとんどの人にとって余裕を持った有酸素運動レベルとなっていたと考えられた。スタッフも前年度よりリラックスした雰囲気であり、各回とも活動中の会話が印象があった。各回の標高差や活動時間、運動負荷量を前年度よりも軽減していることも関係しているものと考えられた。

まとめの会ではすべての参加者から高評価を得ることができた。塾生には、塾修了後も登山を楽しむながら運動習慣を継続し、山に囲まれた群馬県の地の利を活かした健康管理を行なうようアドバイスした。

2年目になり、スタッフの開催

『山岳』第115年の原稿募集

本会の機関誌『山岳』第百十五年(2020年)の発刊は、本年7月中旬を予定しております。原稿の締め切りは4月中旬となりますが、会員の皆様方からのご投稿をお待ちしております。なお、採否につきましては、恐縮ですが編集委員会に一任させていただきます。

手書き原稿でも結構ですが、できますれば下記宛、メールでのご連絡、ご投稿をお願い申し上げます。

[送り先] 〒145-0064 大田区上池台1-35-5 神長幹雄

TEL03-3720-7569 E:kaminaga@ruby.dti.ne.jp

(『山岳』編集委員会)

時のガイドとしての習熟度アップが感じられたが、一方で斬新感が消失するなか一層のスタッフ・モティベーションアップの仕掛けが必要とも思われた。参加者から若干の参加費を徴収しているものの、スタッフ側の実費を賄っているわけでもなく、もっぱら手弁当の企画として開催している。ボランティア意識のみに依存しては長期の継続は困難と思われ、一定の範囲でビジネスとして成立するよう運営計画が求められている。

授)

(群馬大学大学院医学系研究科教授)

NEW MEMBER

父と始めた山登りから『自分の山』へ

中谷健太郎

令和元年5月に入会させていた
だきました中谷健太郎と申します。
中学校1年生になりました。数年
前にも周りの方のすすめで入会届
を出しましたが、保留となったそ
うで、今回、中学生になったので、
もう一度届を出したところ入会が
認められました。日本山岳会に入
会した理由は、入る前から日本山
岳会の皆さんと山に登っていたの
で、入るのが当然だと思っていた
からです。

山登りを始めたのは6歳で、自



父と一緒に長次郎谷から剣岳に登頂(小学校6年生のとき)

分では覚えていませんが、僕がテ
レビを見て「富士山に登ってみた
い」と言ったから、らしいです。い
きなり富士山には登れないからと、
父といろいろな山に登りました。
最初に登った神奈川県の大野山で
は、頂上までの間に、何度もやめ
たいと思いました。でも登り終え
ると、頂上から見た景色、たとえ
ば大きな街が小さく見えることや、
努力をしてここまで登って来たこ
う達成感が自分の中にありまし
た。

富士山に行くまでに必要だから
と、白馬岳の縦走や御嶽山、仙丈
ヶ岳などにも行きました。そして、
なぜか残雪期の北アルプスにも連
れていかれました。今思うと本当
に必要だったのか、疑問です。父
が行きたかったただけなんじゃな
いかと思えます。ただ、それでもい
つも、ちゃんと登頂できるように
計画が立てられていて、安全に登
山が終えられるようにしてくれて
いたことには感謝しています。結
局、目標の富士山には小学校2年

生の時に1泊2日で登り、目標を
達成することができました。

最初に日本山岳会の山登りに参
加したのは、小学校2年生のとき
で、ワンダーフォーゲル部の方た
ちと乾徳山に登りました。初めて
テント泊をした雲取山でも、何か
のイベントで来ていた皆さんにか
レーを分けてもらいました。弟や
妹と神奈川支部の行事にも参加さ
せてもらいました。青年部の三ッ
峠研修に参加したのは、小学校4
年生のときだったと思います。そ
の後、明神岳縦走や剣合宿、最近
ではゴールデン・ウィークの北ア
ルプスでの雪上訓練など、いろい
ろと一緒させていたでいていま
す。一応、父から参加の同意は求
められますが、いつも勝手に予定
が決まっています。

今までで一番怖かったのは、小
学校4年生のときに行った穂高合
宿で、前穂、奥穂を縦走した後、北
穂東稜に行きました。ゴジラの背
では落ちてしまいそうで、怖くて
怖くてしかたありませんでした。
父がロープを着けてくれていまし
たが、正直、信用できず、父も一
緒に落ちるか、自分は宙つりにな
って死ぬんじゃないかと、本当に

怖かったのを覚えています。そん
な怖い山もありましたが、それ
も、やっぱり頂上に着いたときは
嬉しいな、いつも思います。

今までは父が計画を立てていま
したが、北穂から見た大キレット
は自分でも行ってみたいと思いま
した。そして、周りにも登ってい
ない山がたくさんあったので、登
ってみたいと思っています。

北岳から農鳥岳への縦走も、強
風で北岳に登って来ただけで終わ
っているのも、もう一度、ちゃ
んとやってみたいです。海外の山は、
一度だけコロラド・ロッキーへ行
きましたが、日本とは違う雰囲気
を持っていて、そういうような所
もまた行ってみたいな、と思っ
ています。

せっかく日本山岳会に入っ
たので、いろいろな山で、山頂に立っ
たときの達成感やそこで見ら
れない景色を味わえるよう、頑張
りたいです。山では大変なことも
あるけれど、楽しいこともたくさ
んあるので、これからは父とだけ
でなく、日本山岳会の皆さんとも
そういう体験を一緒にできればい
いな、と思っています。今後とも
よろしく願っています。

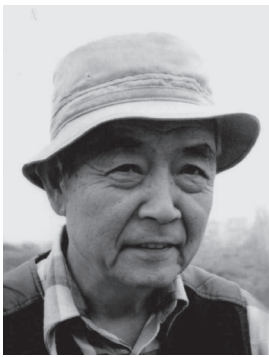
追

OBITUARY

悼

竹内哲夫さんと山

内田 博



竹内哲夫(たけうち・てつお)

会員番号9776

1929年5月 東京都杉並区に生まれる
 1949年 東京高等学校(旧制)を経て
 東京帝国大学入学、スキー山
 岳部に入部
 1953年 東京大学法学部卒業
 1967～1985年 日本国有鉄道山岳連
 盟の副会長および会長を務める
 1985年 日本山岳会入会。紹介者は
 中村純二、渡辺兵力会員
 1995～1996年、2001～2002年 日本
 山岳会評議員
 1997～2000年 同副会長。そのほか
 秩父宮記念山岳賞審査員長な
 どを務める
 2019年9月 逝去、享年90

「山は人を育てる」とは、乗鞍岳
 の麓、安曇村の元村長・福島清毅
 さんの言葉だが、その清毅さんが
 村山雅美さんにせがまれて、秘匿
 していた孫市原を東大に貸与した
 のは、1940(昭和15)年のこと
 だった。村山さんたちはそこに山
 小屋を建てた。銀鞍荘(VSA)と
 命名されたその小屋は、大学の乗
 鞍寮になった。

陸軍幼年学校の生徒として終戦
 を迎えた竹内さんは、東京高等学

校(旧制)を経て東京帝国大学に進
 み、スキー山岳部に入った。戦後し
 ばらく放置されていた乗鞍寮を再
 開するために、1950(昭和25)
 年7月、竹内さんは鳥居鉄也さん
 に連れられて乗鞍に入ったが、以
 後、春夏秋冬を問わず、寮の維持
 管理のためここに通い詰めた。そ
 の都度、鈴蘭小屋にも顔を出した
 ものだから、鈴蘭小屋の主人・清
 毅さんから「そんなに乗鞍が気に
 入ったのなら、俺の所に養子に來
 ないか」と誘われ、断るのに苦労し
 たとのことだった。

南極観測が始まると、その準備

に竹内さんも引つ張り出された。
 「南極には線路がない」という妙な
 理由から勤め先・日本国有鉄道の
 許可が出ず、南極観測隊に加わる
 ことはなかったが、1985(昭和
 60)年、南極最大の露岩地帯・ドラ
 イバレーの調査に参加し、(勲極地
 研究振興会の理事を長年務めるな
 どして、日本の南極観測事業にも
 寄与した。

竹内さんは、日本山岳会の副会
 長や評議員を長年務められ、その
 発展に多大な貢献をされたのだが、
 具体的な成果を記すことは難しい。
 それは竹内さんのお人柄に起因す
 るのだろう。竹内さんは、国鉄の
 常務理事をはじめ数々の要職に就
 かれた偉い人なのだが、誰に対し
 ても謙虚で、表に出ることを嫌っ
 た。

たとえばメトロ会。「メトロ会
 の二十年を振り返って」と題して
 竹内さんが書いた文章によると、
 「そもそもメトロ会の発足は、確
 か日本山岳会の総会の折に、私に
 早稲田の日下田君、小倉君から『戦
 前からあった早稲田・立教・東大
 の三校連絡会をまたやろうではな
 いか』と提案があり、立教の中村太
 郎君の強い支持もありおこなわれ

ることになった」

とあり、また、メトロ会という
 名称は当時、竹内さんが社長だっ
 たメトロポリタン・ホテルをその
 会場にしたからでもあった。普通
 なら竹内さんが会長ということに
 なるのだろうが、竹内さんはその
 会に会長職を置かせなかった。

今では参加数が14校にまでなっ
 たメトロ会が今年も開催され、欠
 席した竹内さんにその報告をしよ
 うと電話したら、奥様が出られて
 「主人は9月12日に亡くなりまし
 た。持病の大動脈瘤破裂で、ベッ
 ドの上で安らかに眠りました」と
 のこと。茫然として言葉を失った。
 後日、竹内さんを偲ぶ会をした
 いと奥様にご意向を打診したとこ
 ろ、「故人から『そういうことは一
 切お断りするように』と言われて
 おります」とのご返事だった。竹内
 さんを知る東大山の会の仲間は、
 「竹内さんらしいな。そういうお人
 柄なのだよ」と応えた。

竹内さんのお人柄が乗鞍岳に育
 まれたものであるなら、その山を
 ホームグラウンドにしている我々
 後輩も、あるいは竹内さんにあや
 かれるかもしれないと、ほのかに
 期待している。

宮原 巍君を悼む

平山善吉

海外出張から帰った日、宮原君の訃報に接し愕然とする。出発の前に具合が悪く、「頑張れよ」と言ったのが最後の会話になってしまった。残念でならない。

私が宮原君と知り合ったのは、日大山岳部に入ってからである。彼は私より1年後輩で、第4次の南極観測隊に参加、このとき山岳部からは同期の仲間ふたりと一緒にだった。

私が越冬(第3次)を終え、昭和基地で彼を迎えたとき、「どうしてあいつらが越冬し、俺だけ帰るのだ」とぼやくのである。このぼやきは、基地での作業中から帰国の船中まで続いた。私は日本に帰ったら、次は北極に行きたいと思

って調べた資料を彼に渡し、「未知の世界は南極だけではない。北極があるではないか」と言って彼を慰めたのである。

1962(昭和37)年、彼は私たちのヒマラヤ遠征隊に加わり、ムクト・ヒマールの頂に立ち、ネパールを知るのである。

それから2、3年後、彼は日本人として初めて北極の地を踏む。これがきっかけで日大は何度か北極に遠征隊を送り、1978(昭和53)年、池田錦重隊が日本人として最初に北極点に立った。

この後、彼はネパールの勉強を始める。そして、ネパールはもともと観光開発をしなければならないと思ひ立ち、大学も機械工学科に学士入学し、飛行機の勉強をしたのである。やがて、苦勞の末にネパール政府の通商産業省に就職し、



宮原 巍(みやはら・たかし)

会員番号5125

1934年 長野県小県郡青木村生まれ
1954年 日本大学理工学部工業化学科入学、機械工学科にも学ぶ。
在学中は山岳部に所属
第4次南極地域観測隊に参加
1958年 初めてネパールへ。ムクト・ヒマールのホングデ初登頂
1962年 グリーンランドに遠征
1965年 ネパール政府通商産業省家内工業局に就職
1971年 シャンボチェの丘にホテル・エベレスト・ビューを建設
1987年 カトマンズにホテル・ヒマラヤを建設
2019年11月 カトマンズで逝去、享年85

1966(昭和41)年、自転車1台を持って日本を後にする。

役所では夢のような将来計画を描き、エベレストの見えるシャンボチェの丘にホテルを造ろう、と提案した。当時、こんなことは誰も信じなかったが、山岳部の建築の仲間が図面を画き、土地も手に入

れ、ホテルを造るのである。
最初は環境破壊が心配され、ヒラリー卿などに反対されたが、最後はヒラリー卿もこれに協力し、1971(昭和46)年、宮原君の最初のホテルが完成する。この後彼は2つ目のホテルをカトマンズに造り、さらに現在、北にアンナプルナ連峰、そして、南にボカラの街を望む世界屈指の景観を誇るサランコットの丘に、3つ目のホテルを建設中である。今回の死は、完成を見ずに道半ばの死であり、さぞ無念であろう。

彼のこれらのホテル建設は私利私欲の事業ではなく、ネパールの発展に繋げたいという信念から始められたものであり、このため彼を支える人は多い。彼はこのような一貫してネパールの未来を憂い、将来計画をネパール政府に建言した。さらに、ネパールの発展には

王政が不可欠とし、王政復古を目指して政党を立ち上げ、自ら党首となり国政選挙に立候補している。

また、これらとは別に、還暦を迎えてからエベレストの登頂を試み、頂上直下8749mまで迫るなど、山岳部の精神も忘れることはなかった。

昨年の3月ごろ彼に会ったとき、「瘦せたな、どうか悪くないのか」と言ったら、早速病院に行つて診てもらったところ、胃が悪いと言われ即刻手術となった。しかし、このときすでに手遅れで、胃を全部摘出し、ほかへの転移も認められた。6ヶ月にわたる入院で、寝たきりの状態が続いたのである。

ときどき見舞いに行くがなすすべもなく、ただ「頑張れよ」と言うだけだった。8月の初めには、看病のためネパールから夫人と娘を呼び寄せたが病状は変わらず、10月の初めに、気分転換のためネパールに帰ることとなり、先の逝去となったのである。

誰よりもネパールを愛した彼の亡骸は、エベレストを間近に望むシャンボチェの丘で荼毘に付された。悲しみに耐えない。

安らかに眠れよ。

合掌

東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

山の詩歌あれこれ

深田久弥・串田孫一・高村光太郎

小原茂延

ことの始まりは、深田久弥の「山恋の詩」であった。

山の茜を顧みて

一つの山を終わりにけり

何の俘のわが心

早く急かるる次の山

深田久弥が昭和42年11月に目指した会越国境・奥只見の山である未丈ヶ岳（1553m）行でのおりに、小出町（現・魚沼市）の神社宮司に乞われて祭壇用の白布に揮毫したもの聞く。

このときの山行は、高辻謙輔氏の調査によれば、案内の不備から登頂に至らなかったそうであり、また、揮毫したのが前夜だったということから、特定の山を指した

ものではないという。

さて、詩にさして詳しくない小生だが、この詩は七五調と読み取れる。「山恋の詩」であったが、久弥生家に近い江沼神社に詩碑として建立され「山恋の碑」と呼ばれるようになり、加賀大聖寺藩ゆかりの地にふさわしいモニュメントとなった。なおその後、久弥が初めて登った山である富士写ヶ岳には「山恋の詩」として説明板がある。

串田孫一の『山のパンセ』Ⅲの中に「水」（1963年6月）という小編があり、その中で山の水を飲む喜びを表現して高村光太郎の詩として、

山へ行き

何をしてくる

山へ行き

みしみし歩き

水飲んでくる

を紹介している。この詩、いや歌を深田久弥が好み、いろいろ引

用したようで、なかには引用と注意書きがあっても早合点する輩も出て、深田の作と勘違いにも及んだようで、それを見た小生は哑然としたものである。串田も山の詩を多く書いており、このように5行に示されると五七調の詩と受け止めたのではないか。あるいは広義の詩と解釈の上だったやも知れない。

近藤信行氏の『深田久弥 その山と文学』（平凡社、2011年）によれば、深田がジュガール・ヒマールなどのヒマラヤ行（1958年）の直後、写真集『日本アルプス』に添えた一文で、

結局私の山登りは高村光太郎の歌のように、
山へ行き、何をしてくる、山へ行き、みしみし歩き、水飲んでくる

それだけが全部であったようだ。せめては、私は山のような人間にならねばならぬ。
山のような文章が書けるようにならねばならぬ。

と述懐しているそうである。なお、この歌の原典は『高村光太郎全集第11巻 短歌・俳句他』（筑摩書房、1958年）の短歌篇に年代不詳として収録されている。

活 動 報 告

資料映像委員会

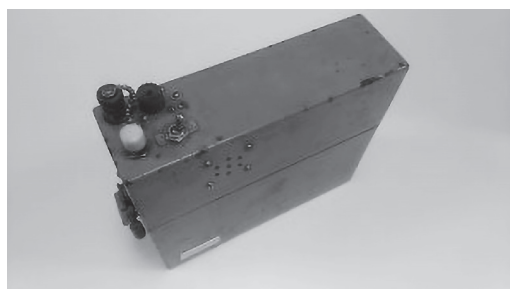
「第23回全国山岳博物館等連絡会議」開催

2019年11月16日(土)13時から17時まで、日本山岳会集会所で開

催した。

参加館は8館で、富山県「立山博物館」、立山カルデラ砂防博物館、松本市山と自然博物館、公益財団法人植村記念財団、秩父宮スポーツ記念博物館、市立大町山岳博物

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。



会議で話題提供した本会のマナスル登山資料「世界で初めて製作して使用した携帯通信機」

館、深田久弥山の文化館、東京都写真美術館、本会からは委員・理事11名、オブザーバー2名が参加。今回はオブザーバーも加わったので、集会室は満杯となった。

1 各館の状況

【公益財団法人植村記念財団】内藤智子

当館は冒険家・植村直己の業績を顕彰し、その冒険精神である「ウエムラ・スピリット」を永く後世に伝えていくための事業として、企画展示および自然体験事業を行なう団体である。企画展示は4回行なった。自然体験事業は小・中・高生対象として12回、一般対象は

3回実施した。

【市立大町山岳博物館】関 悟志

企画展「北アルプスの山小屋の歴史」を開催。北アルプスの山小屋の歴史と建築に焦点を当て、その特徴を紹介するとともに、関連の各種催しを併せて実施した。また、ライチョウ飼育繁殖を継続実施している。その一部の一般公開を開始したが、来館者に大変好評である。

【東京都写真美術館】関次和子

実施する展覧会は、会期はまちまちだが、年間約20本行なっている。日本における写真・映像文化のセンター的役割を果たすとともに、国際的な交流の拠点となるべく、目標とする「質の高い写真・映像文化と出会う美術館」にふさわしい展覧会開催を目指している。自分の担当は自然科学系の写真展や調査研究を対象としていることから、日本山岳会との関わりも多い。自然や風景を対象にした展覧会は人気の高いジャンルなので、今後も継続する。また、立地上外国人の来館者も多い。

【富山県立山博物館】高野靖彦

「立山ふしぎ大発見」、「かがやく天産物」の2つの特別展を開催した。また、館内の施設まんだら遊

苑では、天国と地獄を体験できるテーマパークを置いたが、関東地方からの来館者も多かった。そのほか当館で力を入れているイベントに、夜間の開館がある。「ミュージアムdeナイトin芦峠寺」、「まんだらナイトウオーク——光と香りのページェント——」を実施した。

【深田久弥山の文化館】紋谷友幸

深田久弥に関する資料の収集・展示・発信、講師による山（自然）を巡る講演会（聞こう会）、深田久弥の作品を精読する読書会などの学習、施設整備、友の会新睦を目的とした登山会などの行事、そのほかいろいろな事業を行なっている。しかし、問題点として、若者たちへの深田久弥の認知度が低下したことである。

【秩父宮記念スポーツ博物館】伊藤 藤敬

当初は新国立競技場内に再開館する予定であったが、その後の大幅な競技場の設計変更により、別の場所に設置される予定になっている。現在は休館中であるが、再開時には全く新たなコンセプトの下に、スポーツ文化の多様さを示せる博物館としてお目に掛けたいと考えている。

【松本市山と自然博物館】内川潤季

企画展「身近な昆虫、トンボ」を実施した。収蔵資料に、植物系資料、昆虫標本を多く所蔵しており、身近な自然環境への意識高揚のため、実施した。当館は、山里の環境を残した市営アルプス公園内にあり、植物、野鳥、蝶（オオムラサキ）などの観察を行なう自然観察会などを実施した。

【立山カルデラ砂防博物館】是松 慧美

当館は、立山と立山カルデラの自然と歴史、そこで営まれる砂防

事業について解説している博物館である。ゴールデン・ウィークには、台湾など外国人の来館者が多い。屋内の企画展、講演会などに加えて、野外ゾーンでの行事として、フィールド・ウォッチング、かんじき体験、砂防体験学習会などたくさんのイベントを実施している。それぞれ参加者に大変好評である。

2 終りに当たって

各館の共通課題として、入館者減、資料の整理保管、設備の老朽化、人材育成、外国人対応、山岳関係者の知名度低下などが挙げられた。その中で入館者対策に関して、ネット活用の意見が挙げられた。

「特に若い世代はほとんどネットを見ている。日本山岳会にもスマホで見られるホームページがある。すぐにも対応できるので、直ちに実行に移そう」という意見が出たが、参加者の意見も大いに反応し、盛り上がった。今後の展開が楽しみになった。

(齋藤知茂)

図書受入報告(2019年12月)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
矢崎茂男(編)	甲斐百山『甲斐山岳』第11号別冊	208p/21cm	JAC山梨支部	2019	発行者寄贈
JAC休山会(編)	休山悠遊 100号記念 特別号	57p/30cm	JAC休山会	2019	発行者寄贈
須藤茂	旅客機から見る日本の名山	186p/26cm	イカロス出版	2019	出版社寄贈
群馬県山岳団体連絡協議会(編)	群馬の山歩きベストガイド : 安心して登れる126コース	268p/21cm	上毛新聞社事業局出版部	2019	JAC群馬支部寄贈
第4回「山の日」記念全国大会実行委員会(編)	第4回「山の日」記念全国大会 報告書	50p/30cm	第4回「山の日」記念全国大会実行委員会	2019	発行者寄贈
石岡繁雄の志を伝える会(編)	『前穂高岳東壁遭難63年目の検証 ナイロンザイル事件の光と影』に対する「反証・反論」	195p/30cm	石岡繁雄の志を伝える会	2019	発行者寄贈
Hoyle, Tom (ed.)	New Zealand Alpine Journal 2019 (Vol.71)	134p/25cm	New Zealand Alpine Club	2019	発行者寄贈
Paterson, Jenny (ed.)	The Journal of the Mountain Club of South Africa 2018 (No.121)	166p/23cm	Mountain Club of South Africa	2019	発行者寄贈

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

越後支部

「日本山岳会のエベレスト登頂50周年」の記念講演開催

越後支部では、12月14日新潟市で神崎忠男氏（日本山岳会現評議員・元副会長、日本山岳協会前会長）をお招きして「日本山岳会のエベレスト登頂50周年」の講演会を開催した。

この講演会は、日本山岳会創立120周年記念事業の一環として推進されている「日本山岳会エベレスト登頂50周年記念事業」（1970年5月11日・日本山岳会隊登頂）として、地方支部としてはいち早く開催され、新潟県山岳協会との共催により123名が参加した。

「テレビ報道に見るエベレストの状況」、「1953年英国隊エベレスト初登頂、E・ヒラリーの子息

が検証」、「日本山岳会エベレスト登頂に至る暗と明」の3本のビデオと日本山岳会エベレスト登山隊でのエピソードや、その後の日本山岳会における「チョモランマ登山隊1980」、「三國友好登山隊1988」の登山日程や社会・時代背景などの比較、「地球3つのおヘソ」をめぐる人類の挑戦など、自らの経験を交えての話題であった。

まず、エベレスト登山の現状として、頂上へのルートが登山者で大渋滞している様子や、時間待ちしている間に凍傷を負い、場合によっては凍死するという問題が衝撃的なビデオ映像として映し出された。最初に英国隊がエベレスト偵察隊を出したのは1921（大正10）年、ようやく登頂を果たしたのは1953（昭和28）年で、32年（9回登山隊派遣）の月日を費やしている。1970年の日本隊も組

織的な極地法登山によって苦勞しながら登頂を果たした。

神崎さんの講演要旨としては、

「スポーツクライミング、ガイドブック登山が昨今の登山風潮となっているが、パイオニアワーク、チャレンジ精神、アルピニズムなどの登山思想が中心だった時代が懐かしい」、「北極点、南極点、エベレストが地球の3つのヘソとして到達一番乗りを目指して、探検家が躍動した時代。南極点争いでは、アムンゼン隊（ノルウェー）とスコット隊（イギリス）、そして白瀬中尉隊。日本人としての北極点到達ドラマは、植村直己（単独）と目大隊で繰り広げられた。すでに人類は、地球の3つのヘソに到達をしたが、この挑戦により自然と人間の共生を人類が強く意識するようになった」ということが印象的であった。

日本山岳会エベレスト隊については、1970年5月11日、いよいよ頂上が見えたときの松浦輝夫と植村直己のエピソードは、広く知られている。その陰で成田潔隊員の死亡や神崎忠男隊員と平林克敏隊員の滑落など、臨場感ある事実や報告、貴重な酸素ボンベが30

歳以上にしか認められなかったことなども、ユーモアを交えて紹介された。

神崎忠男氏は、これまでに4回エベレストに挑戦しており、登山界においてトップリーダーを歴任されている。「登頂者は有名だが、それを支えた仲間の存在はあまり語られない。登山隊を支えた多くの仲間がいることを忘れないでほしい」、「日本の登山界は、これまで50年周期で変貌してきており、登山界は大きなまとまりにならないければならない」、「日本の山岳団体は、国際交流にもっと力を入れて登山の普及に努めなければならない」など、ヒマラヤ登山史に精通し、登山界を牽引してきた神崎さんの言葉は重みがあった。

ヒマラヤにおいても困難な壁は登り尽くされた感があり、アルパイン・スタイルによる登攀が盛んに行なわれている。冒険や探検としての登山が、スポーツやガイド登山に形を変えて変遷し、広がっている。ますます多様化、大衆化、商業化していく登山とどう向き合っていくのか。講演を拝聴して改めて考えさせられた。

（後藤正弘）



上越・信越 国境山脈

星野秀樹著



2019年10月
山と溪谷社
A5変型判224頁
2200円＋税

写真家の撮った映像により、このうえなく美しい一冊の本に仕上がっている。ジャケットも、まるで絵のようなという形容が当てはまる重畳たる山並みがシックな色に整い、コバルトブルーの透明感ある帯も美しく、全体の手触りも心地よい紙質が使われている。中の写真は絶品揃いであるが、「あとがき」に記されているように、扱っている山々のほとんどが著者にとって「里山の暮らしとともにある『裏山』的存在」である。な

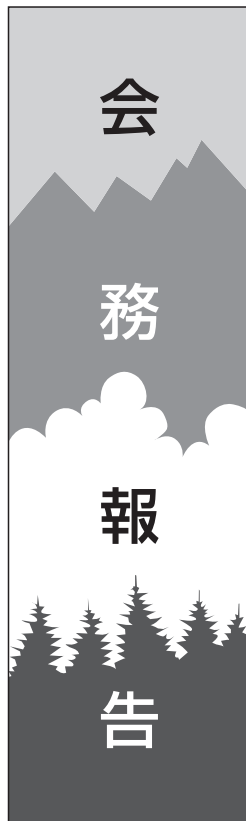
で、そのレンズの捉える視点も里の暮らしや営み、食材、人々の長年培ってきた生活・風土などをしていねいに見詰めており、そこがガイドブックにとどまらない奥行き深さや、視覚的に喜びを伴う読み物として魅了されるゆえんである。

とは言え、高所登山の経験も豊富な写真家の手による山の映像は、岩場あり、雪山あり、スリリングな高度感あふれるものもあり、その臨場感たつぷりな各ページに読者の目は釘付けになるだろう。

いわゆる百名山やアルプスなどの有名所とは一線を画した、落ち着いた日本らしい山を求めている登山者や、自分の拠り所的な山を心に温めたい人にとっては、ガイドを超えた一冊として、かたわらに置いておきたいものであるうこともよく分かる。

ネットで居ながらにしてほとんどの情報を得ることができる昨今だが、たまたま筆者が書店で小耳に挟んだところでは、店頭での売れ行きもそこそこな様子。思うに、ガイドとしての要素を兼ね備えながら本としての存在意義を静かに主張していくには、このような質の高いビジュアル面と、その地域に息づきながらの腰を据えた取材かつ、著者の意図するところが明瞭に表われている本作りが求められているのかもしれない。

(中村好至恵)



令和元年度第8回(12月度)理事会 議事録

日時 令和元年12月11日(水)19時00分～21時00分

場所 集会室

【出席者】古野会長、野澤・山本各副会長、永田・古川各常務

理事、安井・清登・清水・飯田・柏・近藤・波多野各

理事、黒川・石川各監事

【欠席者】坂井副会長、神尾理事

【オブザーバー】節田会報編集人

【報告事項】

新会員証の継続発行をご希望の方へ

有効期限が2020年3月31日の会員証をお持ちの正会員の方で2020年4月1日から有効の会員証をご希望の方は、2020年2月29日(土)までに下記口座にお振込み下さい。
振込手数料はご負担願います。ご不明な点は事務局までお問合せ下さい。

- ① ゆうちょ銀行から振込む場合
口座記号・番号 00150 1 696644
加入者名 日本山岳会会員証発行申請
- ② 他銀行から振込む場合
金融機関コード 9900
店番 019 店名 ○一九(ゼロイチキョウ)
預金種目 当座 口座番号 0696644
金額 ￥1,000

通信欄必須事項 会員番号、氏名、おところ、「継続」と明記願います。

1・正会員15名、準会員12名の入会を承認した報告があった。(古野)

2・東京多摩支部設立10周年記念事業インドヒマラヤ・ザンスカール未踏峰遠征を使途とした100万円の募金の事前申請が、東京多摩支部からあった。ほか2件の寄附金の報告があった。(古川)

3・第23回全国博物館等連絡会議に8館8名、日本山岳会から13名が出席し開催されたと報告があった。(清水)

4・全国8館の博物館等に寄託している日本山岳会所有資料について、寄託の更新期間が1年だったものを2年単位で行なうものとする報告があった。(清水)

5・12月7日に開催された支部連絡会議について報告があった。役員15名、31支部が出席した。(永田)

6・「山」第1号最新号を会員から寄贈を受け、120周年記念事業「保有資料のデジタル化」の一環としてスキヤニングし、ウェブに公開する報告があった。(清水)

7・年次晩餐会は509名の会員の出席があり、盛会に終わった報告があった。(永田)

8・北アルプス展望美術館から「日本山岳協会北アルプス展望美術館展」山にみせられた画家達」の名義後援の依頼があり、承認した報告があった。(永田)

9・会報「山」12月号の発行について報告があった。(節田)

ルーム誌 12月

2日 総務委員会
3日 常務理事会 スケッチクラブ

23日	21日	20日	19日	18日	17日	16日	13日	12日	11日	10日	9日	6日	5日	4日
総務委員会	緑爽会	会報編集委員会 自然保護委員会 科学委員会 フ	会 会 会 会 会 会 会 会 会 会 会 会 会 会 会	三水会 つくも会 マウンテンカルチャークラブ	スキークラブ 里山歴史研究会 バックカントリークラブ	総務委員会 資料映像委員会 スケッチクラブ	の自然学研究会 YOUTH CLUB 山	九五会 平日クラブ	理事会 休山会	山岳研究所運営委員会 図書委員会 記念事業委員会 フォトクラブ	スケッチクラブ	総務委員会 スキークラブ	総務委員会 YOUTH CLUB 山岳地理クラブ	山行委員会 図書委員会 YOUTH CLUB

町口純司 (16250)	有賀七海 (15931)	小松平内 (15743)	村越百合子 (15632)	長岡幸則 (13988)	岡本喜久穂 (13927)	道正政信 (13511)	上野美裕 (13407)	川井憲二 (12911)	三浦一 (9505)	福島	神谷圭子 (11391)	中井俊一 (9772)	石川富康 (7191)	白旗史朗 (6068)	橋村一豊 (5821)	山本光二 (4233)	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部
16250	15931	15743	15632	13988	13927	13511	13407	12911	9505	福島	11391	9772	7191	6068	5821	4233	物故	会員異動	会 青年部



◆四国八十八ヶ所歩き遍路 逆打ち①香川県

山行委員会

四国八十八ヶ所1200kmを、春2回、秋2回の区切り打ち1年で歩きます。2020年は閏年。逆打ちの年で、順打ちの3倍のご利益があると言われていきます。4年に一度のチャンスです。初回は88番大窪寺から55番南光坊まで。歩き遍路の経験豊富な四国八十八ヶ所霊場会の公認先達2名が遍路・巡拝・服装などの作法はお教えします。遍路用品は88番札所での購入もできます。

日程 3月19日(木)～28日(土) 9泊10日

集合 3月19日(木) 香川県88番大窪寺。集合9時15分(18日)

(水)夜行バス⇨新宿バスタ

21時35分発⇨19日高松駅

7時06分着 高松駅7時

17分発⇨志度駅7時53分

行程

着⇨志度コミュニティバス8時05分発⇨大窪寺9時15分着)。18日に高松駅または大窪寺近くに前泊されても結構です。

19日⇨88番大窪寺⇨86番志度寺(泊) 20日⇨85番八栗寺⇨83番一宮寺(泊) 21日⇨82番根香寺⇨80番国分寺(泊) 22日⇨79番天皇寺⇨75番善通寺(泊) 23日⇨72番寺甲山寺⇨68番神恵院(泊) 24日⇨67番大興寺⇨66番雲辺寺(泊) 25日⇨65番三角寺(泊) 26日⇨64番前神寺⇨62番宝寿寺(泊) 27日⇨61番香園寺⇨60番横峰寺(泊) 28日⇨59番国分寺⇨55番南光坊⇨今治駅(解散)

1日20～30km余(健脚向き)

参加費1万円(通信費、写真代等)、1日1万円(宿泊代

費用 歩程

はその都度精算、賽銭、納経、昼食代)、傷害保険は各自お掛けください。遍路用品は約2万円。別途往復交通費。

定員 10名(先着順)

申込み 3月10日(火)までに数見直へ

直へ

TEL 090-7204-4668

✉ sanko@jac.or.jp

◆斑尾山等スノーシューハイク

山行委員会

新赤倉温泉に宿泊し、斑尾山や妙高高原で、スノーシューハイクを楽しみます。

日程 3月16日(月)～18日(水)

集合 3月16日11時30分 上越妙高駅

行動予定 16日⇨上越妙高駅⇨ユアーズイン(泊)宿付近にて、スノーシュー足慣し)

17日⇨宿⇨斑尾山⇨宿(天候によりコース変更あり)

18日⇨宿⇨いもり池周辺⇨宿⇨上越妙高駅

解散 3月18日15時30分 上越妙高駅

参加費 2万6000円

募集人数 15名

募集人数 15名

募集人数 15名

募集人数 15名

募集人数 15名

募集人数 15名

募集人数 15名

申込み (会員番号、氏名、性別、生年月日、住所、自宅電話番号、携帯電話番号、緊急連絡先を)ご連絡下さい)

2月25日までに菊池武昭まで

TEL 090-6319-7602

✉ sanko@jac.or.jp

*申込者に詳細案内をお送りします。

◆第8回小島鳥水祭ご案内

主催 公益社団法人日本山岳会

主管 公益社団法人日本山岳会

国支部

国支部

国支部

国支部

国支部

国支部

国支部

日時 4月11日(土)～12日(日)
場所 香川県高松市

《4月11日(土)》

①講演会「日本山岳会エベレスト
登頂50年」11時40分～12時
40分(無料)

会場 喜代美山荘「花樹
海」高松市西宝町3丁目5
番10号 TEL 087-861
-5580

講師 神崎忠男氏(日本山
岳会元副会長、1970年
日本山岳会エベレスト隊参
加、1995年日大エベ
レスト隊長)

②昼食会 13時～13時30分(会費
5000円 昼食後、バス
などで花樹海から移動)

③碑前祭 14時～15時30分(無料)
会場 香川県高松市 峰
山公園・はにわつ子広場・
小島鳥水顕彰碑前

*記念講演会 演題 「日
本山岳会黎明期の人々」講
師 古野淳氏(日本山岳会
第26代会長、1995年日
大エベレスト隊で北東稜か
ら初登頂)
*献花、詩吟、合唱、記念
撮影

*閉会 バスで花樹海へ
送迎 高松駅へ送迎(16時
30分ぐらい)

④夕食懇親会・宿泊 ホテル「マ
リンパレスさぬぎ」高松市
福岡町2丁目3の4
TEL 087-851-6677

会場 夕食懇親会・宿泊 1
万3000円、夕食懇親会
のみ8000円

*3支部(山陰、広島、四
国)交流会を兼ねる

《4月12日(日)》

⑤記念登山「金毘羅を訪ねる」琴
平山(524m)、大麻山
(616m)往復縦走

登山口(9時) 金毘羅宮
―琴平山―大麻山―金毘
羅宮―登山口(13時) 高松
駅解散(15時) 交通費は別
途徴収

◎小島鳥水祭の昼食会、碑前祭、夕
食懇親会・宿泊、記念登山の申込
み期限 2月29日(土) 申込み先 四
国支部事務局 森山宏昭

TEL 090-4971-1001
✉ d8q7un9@384.jp

◆第29回 「山好きの山の絵展」
開催

アルパインスケッチクラブ

この山の絵展は、毎年2月に開
催しており、今年は29回目を迎え
ます。60人の会員が実際に登り、見
た山々を描いた作品で、水彩画、油
彩画、版画など約70点とスケッチ
ブック十数点を展示します。毎年
山好きの方々のほか、多くの方
が来場され、好評をいただしてい
ます。

会期 2月16日(日)～22日(土) 10時
～18時(初日は11時45分か
ら。最終日は17時まで)

会場 JR有楽町駅前 東京交通
会館2Fギャラリー(千代
田区有楽町2-10-1
TEL 03-3215-7962
入場無料)

*会員の芳賀淳子・小出和子によ
る「山の絵―人展」を同会館B1
Fエメラルドルームにて同時開
催します。ただし、開催時間は
10時30分～16時30分(初日は13
時から。最終日は15時まで)。



◆編集後記◆

●新年初山行は、毎年恒例の房総
の低山ハイキングでした。当初、半
島中央部にある高宕山(たかごやま、330
m)を予定していたのですが、昨
秋の台風15号・19号による被害が
予想外に大きく、まだ爪痕が残つ
ているため、その東にある八朗塚
(はちろうづか、342m)までとし、「関東ふれあ
いの道」を往復しました。

●そのような訳で、山歩きは消化
不良でしたが、山行の主目的は下
山後にあります。富津市金谷にあ
る「天然温泉海辺の湯」での新年会
です。目の前に東京湾を望みなが
らの展望風呂は最高の気分、湯
上がりのビールと海の幸がこれま
たご機嫌。ほろ酔いで帰りのバス
に乗るころには、シルエットとな
った伊豆大島の彼方に見事な夕陽
が沈んでいきました。(節田重節)

日本山岳会会報 山 896号

2020年(令和2年)1月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社